

幼児にきかせる話



ライオンと兎

獸の王様のライオンはけらいの獸達のお耳が大好きでした。兎さんの耳は長くて、柔らかで、おいしさうなとき色をして居るものでしたから特別に好きでした。毎日毎日夜になるのを待つて兎サン一匹づゝ呼んではお耳を喰べて居りました。兎さん達は困りますので、『どうぞお耳を喰べないで下さい』と、一生懸命にお願ひしても王様は一向にお聞きになりません。今日は兎吉サンの番、あしたは兎ユサンの番、よあさつては兎雄サンの番――

しげる

といふ風にお翁さんからお婆さん、おとうさんおかあさん、坊ちやんでもお嬢さんでもあかちやんでも誰れでも、兎さんは王様にお耳を差し上げなくてはなりませんので、みんな泣いて居りました。井戸の中に隠れたり、穴を掘つて、もぐつたりしても、王様はお耳をもつて、引ぱり出しては喰べてしまひました。

或る時、兎サン達は大勢お山に集まつて、相談會を開きました。

『ネー、私達は昔から、お耳の長いのが自慢だつ

たのにねー。こんなにお耳を喰べられてしまふとおしまひには兎のお自慢にするものが無くなつてしまふぢやないか、どしたらいいだらうネー、どうかして、王様にお耳を喰べられないやうにしたいものだネー、何かいい工夫はないかしら、みんなで考へやうよ。ほんとにさうだよ。』それからみんなは、一生懸命に考へました。井戸も駄目だし穴もだめだし。

或る者は、『けもの、世界から逃げ出してしまはうよ』と云ひ出しましたが、けもの仲間からぬけたら、人間か、虫かにならなくてはならないし、それでは困るし、或る者は『水の中に住まはうよ』と、云ひ出しましたが、一寸位這入れても、おさかなのやうにながいことずーつと住む事は出来ませんから、これも駄目。『どうしたらいいだらう。どうしたらいいだらうネ。』

丁度、その日は「強情ツバリ」で有名な、兎一サ

ンが王様にお耳を差し上げる番でした。『どうしたつて僕は王様に喰べられ度くないや、大事なお耳をたべられてたまるものか』と、「ウン」と力んだ兎一は、だまつて考へはじめました。一生懸命に考へました。朝から考へて、とう／＼夕方になつてしまひました。お日様は、もうじきお山に這入らうとして、まづかにキラ／＼として居りました。じつと考へこむで居た兎一サンのお顔も、お日様に負けずに、まづかになつてしまひましたが、お日様がすつかりお山にかくれてしまひましたその時、『アツ、いゝことを考へた』といつて、兎一サンはビヨンと飛び上りました。

『ネ、君達、ゴムでね、僕達みたいな兎を澤山こしらへやうよ、一生懸命上手にね、そして其のお耳にね、おいしい／＼クリームを塗つてネ、王様の所に置くの、すると王様はつかまへて噛り出すでせう。所がゴムだからなか／＼噛めない、し

かし、クリームはいゝにほひがしておいしいし、一生懸命嚙つて居らつしやるうちにくだびれて眠くおなりなさる、グー／＼おねむりになつて、あしたお目がさめた頃はゆふべの事なんかお忘れになるもの、ネどうだらう君達、どう思ふ』

『賛成、賛成』あつちからもこつちからも、パチ／＼手をたゝいて大賛成をいたしました。さつそくにゴムで兎をこしらへました。そしてクリームをコテ／＼ぬりつけました。

『サー出来た、出来た。ほんとうによく出来たね、まるでほんとの僕たちみたいだネ、どうだい、此のお耳のおいしさうなこと、クリームのにはほいにはひだネ』みんなはもう大變に喜んでしまひました。中でもその日の番にあたつてゐる兎一サンは大喜び、ゴムの兎をだつこして、勇んで王様の御殿にとんで行きました。そして、王様の卓の上に、そつとゴム兎を置いて、自分は、卓の下

にもぐつて、じつとして居りました。

そうとも知らぬ王様は、今晚も又、兎のお耳のごちさうにならうと思つてニコ／＼してお椅子にすはるといきなり、ゴム兎を嚙りはじめました。

『今日のは少しかたいな、けれどもいゝにほいにするな』そう云つて、ムシャ／＼たべて居るうちに、いつのまにかいゝ心地になつてグウ／＼眠つておしまひになりました。

その時、兎一は卓の下から、そつと出て、王様のめし上りかけのゴム兎をかへて、大急ぎでうちにかへりました。他の兎たちはもう兎一がかへるか、もうかへるか、さつきから待つて居りましたが、ガラツと戸があいて、兎一のお耳が見えました時、「ワーツ」と、手をたゝきました。

パンザイ、パンザイ、皆はもう嬉しくて、ワイ／＼おどり出しました。『もうこれで大丈夫だ、これからはもう、だあれもお耳をたべられな

くなる。』兎たちはすつかり安心してしまひました。

あしたも、あさつても、又そのあしたもそのあしたも、兎サン達は此の様に致しました。ライオンにはまだ何もわからないのでした。

すると、ある晩の事でした。今日は兎子サンの番でしたので、夕方になると、みんなでこしらへたゴム兎をもつて、ピョン／＼と、王様の御殿の方に飛むで行きました。ちつともこはくはありませんでした。

ところが、どうしたはづみか、御殿のローカの曲り角の所で、バツタリ、王様にあひました。

『ウン、よく来たな、今日はおまへの番か、サーお出で、オヤ／＼、お前は何をもつて居るのだ、ハハー兎のおもちやか。』兎子サンはこはくてこはくて、ブル／＼して居りましたが、グズ／＼してゐてお耳を喰べられては大變ですので、とう／＼

思ひきつて、王様にあやまることにして、今まで「ゴムの兎」のことをすつかりお話致しました。

そして、『王様どうかお許し下さい私共兎は昔からお耳の長いのが大變なお自慢ですので、王様に差し上げてしまひますと、もう、私共のお自慢がなくなつてしまひます、どうか／＼、もうこれからは、お耳を喰べないで下さいまし。』と、一生懸命におねがひ致しました。

さすがの王様も、自分が毎晩兎を嚙りながら眠つてしまつた事が、おかしいやら、兎共のした事が可愛い／＼やらで、とう／＼、カラ／＼カラと、大聲でお笑ひになりました。

其れから王様は、もう兎サンのお耳を決して喰べなくなりました。